

平成21年5月22日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2006～2008
課題番号：18320049
研究課題名（和文） 19世紀イギリスにおける男性性の構築と脱構築のポリティクス
研究課題名（英文） The Politics of Constructing and Deconstructing of Masculinity
in the 19th-Century Britain
研究代表者
玉井 アキラ（TAMAI AKIRA）
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：00079097

研究成果の概要：

19世紀イギリスにおいて、男性性という理念・規範がいかに形成されたか、また逆にその理念・規範においていかに揺らぎが生じたのかを、ウォルター・ペイターとオスカー・ワイルドを中心にして、当時の文学テキストにおける男性性の表象を検証することにより具体的に把握することができた。この研究を通して、19世紀末イギリスにおける男性性をめぐる構築と脱構築との葛藤のダイナミズムが理解可能となった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	6,000,000	1,800,000	7,800,000
2007年度	5,300,000	1,590,000	6,890,000
2008年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
年度			
年度			
総計	15,100,000	4,530,000	19,630,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：男性性、マスキュリティ、ホモセクシュアリティ、女性性、新しい女、ウォルター・ペイター、オスカー・ワイルド、J.A. シモンズ。

1. 研究開始当初の背景

日本ワイルド協会および日本ペイター協会において、イギリス19世紀後期から20世紀初頭にかけての文学世界を対象にして、男性性の歴史的編成と同性愛の問題に関心をもっている研究者を中心にして共同研究を開始した。

2. 研究の目的

19世紀後期のイギリスにおいて、男性性の理念・規範がいかに言説によって形成されていったか、あるいはその理念等がいかに対抗的な勢力・言説、そして特に文学的表象によって脱構築されたかを、総合的に研究するのが目的であった。男性的主体の確立とその揺らぎのありようとその過程を、文化的・歴史的状

況を踏まえつつ、文学テキストを中心とする言説を通して具体的に検証することをめざした。

3. 研究の方法

研究班を、大きく、ペイター研究を中心とする班とワイルド研究を中心とする班に分けて研究に従事し、年に数回の共同研究会を開いてそれぞれの研究成果を報告し合った。

また、海外および国内において本研究課題に不可欠な文献・資料の収集に努めるとともに、海外の研究者の招へいや海外で開催される学会大会・フォーラムへの参加等、国際的な学術交流を積極的に実行した。

4. 研究成果

19世紀イギリスにおける男性性をめぐってその構築と脱構築をはかる言説界のダイナミズムを、文学テキストのみならずその周辺の文化的・歴史的テキストにわたり広範に検証することを通して、明確に把握できたことは大きな成果であった。さらに、本研究課題は、今後における研究発展の可能性を多分に孕んでいる、なお一層興味深いテーマであることを確信できたことも大きな成果であった。

研究成果は、『19世紀イギリスにおける男性性の構築と脱構築のポリティクス：研究報告書』（玉井アキラ編著、A4版、総ページ数160、平成21年3月）にまとめて刊行した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計10件)

- ①「岩永弘人、「Effeminate masculinity」—ワイルド『WH氏の肖像』に見られる＜友愛＞」、『19世紀イギリスにおける男性性の構築と脱構築のポリティクス：研究報告書』（玉井アキラ編著、大阪大学文学研究科）、p p. 7-12、2009年。査読なし。

- ②野末紀之、「語りえぬものを語る—イーデイス・ウォートン “The Eyes” におけるホモセクシュアリティ」、『19世紀イギリスにおける男性性の構築と脱構築のポリティクス：研究報告書』（玉井アキラ編著、大阪大学文学研究科）、p p. 76-81、2009年。

査読なし。

- ③角田信恵、「政治と性と物語—アフラ・ベイン『美しい浮気女』（一六八八）」、『長い十八世紀の女性作家たち—アフラ・ベインからマライア・エッジワースまで』（英宝社）、p p. 9-32、2009年。

査読あり。

- ④宮崎かすみ、「変質論とダーウィニズム—『ジェイン・エア』から『ドラキュラ』へ、「内なる他者」表象の変遷」、『英語青年』（研究社）、第154巻第10号、p p. 562-565、2009年。

査読なし。

- ⑤玉井アキラ、「シャーロット・ブロンテ小説の可能性—『シャーリー』の場合」、『ブロンテ・スタディーズ』（日本ブロンテ協会）、第4巻第6号、p p. 1-18、2008年。

査読あり。

- ⑥森岡伸、「ペイターと “Breeze”」、『日本ペイター協会会報』（日本ペイター協会）、第29号、p p. 8-9、2008年。

査読なし。

- ⑦十枝内康隆、「限られた読者のための自伝—ウォルター・ペイターの『家のなかの子』」、『文学研究は何のため—英米文学試論集』（長尾輝彦編著、北海道大学出版会）、p p. 191-203、2008年。

査読あり。

- ⑧野末紀之、「混迷への誘惑—『文体論』における言葉のパフォーマンス」、『ペイター論集』（日本ペイター協会）、第4号、p p. 15-31、2007年。

査読あり。

⑨宮崎かすみ、「ペルセポネと透明性の美学」、
『ペイター論集』（日本ペイター協会）、第
4号、pp. 33-47、2007年。
査読あり。

⑩玉井アキラ、「<新しい女>小説」の諸相
—小説・演劇・絵画』、『New Woman Fiction：
別冊解説』（アティーナ・プレス）、pp.
1-11、2006年。
査読なし。

[学会発表] (計5件)

①「十枝内康隆、「ペイターにおける<友愛>
のディスコース」、日本英文学会北海道支
部第53回大会（北海道大学）、
2008年10月5日。

②野末紀之、「後期ペイターにおける男性性
の再規定」、日本英文学会北海道支部第5
3回大会（北海道大学）
2008年10月5日。

③宮崎かすみ、「武士道的マスキュリニティ
と同姓愛的マスキュリニティの融合？—
漱石の『心』におけるキリストとワイル
ドの影」、日本英文学会北海道支部第53
回大会
（北海道大学）
2008年10月5日

④宮崎かすみ、「Prasing Samurai
Masculinity by Way of the Biblical
Language-The Influence of Christianity
and Oscar Wilde on Soseki Natsume's
Kokoro,” 国際学術会議 “What is
Masculinity? - How Useful as a
Historical Category”
（ロンドン大学バークベック校）
2008年5月15日。

⑤角田信恵、「ワイルドとジャーナリズム」、
日本ワイルド協会32回大会
（慶應大学）
2007年12月15日。

[図書] (計2件)

①玉井アキラ、編著『19世紀イギリスにお
ける男性性の構築と脱構築のポリティク
ス：研究報告書』（大阪大学文学研究科）、
160頁、2009年。

②玉井アキラ・角田信恵、共編著『The
Woman's World, November1887-
October 1889：監修・復刻』
（アティーナ・プレス）、1280頁
2008年。

6. 研究組織

(1)研究代表者

玉井 アキラ (TAMAI AKIRA)
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：00079097

(2)研究分担者

岩永 弘人 (IWANAGA HIROTO)
東京農業大学・地域環境科学部・教授
研究者番号：20193758

角田 信恵 (TSUNODA NOBUE)
岐阜聖徳学園大学・外国語学部・教授
研究者番号：90113323

十枝内 康隆 (TOSHINAI YASUTAKA)
北海道教育大学・教育学部（旭川校）・准
教授
研究者番号：80359489

野末 紀之 (NOZUE NORIYUKI)
大阪市立大学・文学研究科・准教授
研究者番号：70198597

宮崎 かすみ (MIYAZAKI KASUMI)
横浜国立大学・教育人間科学部・准教授
研究者番号：10255200

森岡 伸 (MORIOKA SHIN)
札幌医科大学・医学部・教授
研究者番号：40113633

(3)連携研究者
なし